

認知症とよりよく生きる
“ワーキンググループみやぎ”を基地に

～やさしいまちを一緒につくろう～

仙台チーム

平成29年2月17日報告会

～本人ミーティングを生み出したのは当事者の声～ 支えるのは当事者が参加するネットワーク



“認知症とともにによりよく生きる”をめざして活動する
【宮城の認知症とともに考える会】

個人参加

当事者・家族の会・認知症専門医・研究者・社会福祉士・精神保健福祉士・作業療法士・看護師・保健師
弁護士・薬剤師・介護支援専門員・施設職員・地域包括職員・行政職員・マスコミ・NPO・企業関係者ら

「本人ミーティング」をしよう 「おれんじドア」の経験を活かせる！

1. 企画は当事者を中心にパートナーと協働

「おれんじドア」の経験を活かせばできる！

- ・ ミーティングの主役は当事者 / 司会進行は当事者。
- ・ 会場確保・会計・記録はパートナー。
- ・ 付添い家族は本人ミーティングに入らず、別室で懇談する。
- ・ パートナーは両方の話合いに同席。

2. 参加への声がけ ～ “集める”ではなく“集まる”ミーティングに～

- ・ 当事者による当事者への「呼びかけ」を作成。当事者・支援者が「本人ミーティング」の趣旨を説明し、希望する人を募る！
- ・ おれんじドアとつながりがある当事者のつどいに呼びかける。
- ・ 家族と同居する人には支援者から家族に趣旨を説明する。

「おれんじドア」＝不安な時期に希望とつながる「出会い」の場

当事者による当事者のための総合相談窓口（月1回）

◎ “話せない”と言われた人たちが**当事者の司会**で本音を語り、笑顔を取り戻す！
入口のドアを開けた「本人」の笑顔がおれんじドアを継続する力に！

「本人ミーティング」の実施例

- 【会 場】 公共交通機関で行ける貸会議室・市民活動スペース 等
【時 間】 午前の1時間30分程度 休憩を挿み終了後にランチなども
【テーマ】 話し合うテーマをわかりやすくボードに書き出して話し合いを進める
「日々感じている生活のしずらさや困りごと」「生活の希望や願い」
《例》 「本人同士の交流は必要か、どんな場なら行きたいか」
「医療・介護・行政窓口・地域・家族の支援はどうあって欲しいか」



《振り返り》

- ・ 飲物はお仕着せでなく各自選ぶ方が良かった。
- ・ 参加者の経験に基づく意見や提案が出され、“ミーティングはできる”と確信した。
- ・ 話を深めるにはテーマを1つか2つに絞り、参加者のペースに合わせてゆっくり進行した方がよい。話し合うテーマを1題ずつボードに示したので参加者がテーマに集中できた。
- ・ パートナーの同席者は代弁せず、本人の話を待つことが大切。
- ・ 休憩時やランチの時の方がリラックスして本音が出やすかった。
- ・ ミーティングのまとめとして、話合ったことを参加者に確認した方がよい。

ミーティングでの本人の声

家族がうるさい。言ってくれるのはありがたいが心配のしすぎ。
できることを奪わないでください。
失敗しても怒られない環境が大事です。

- ・安心してすごせる居場所が欲しい。
- ・私！認知症ですと言える社会に。
- ・デイサービスだけではなく、毎日でも行ける「カフェ」や「つどい」の様な楽しく、自分が自分で居られる居場所がほしい。

- ・薬もだけど、環境も大事。
- ・前向きに生きるための様々な工夫を話し合う。

- ・ケアマネージャの顔を見たことはあるが、家族と話している。自分で話ができるのに自分のことを自分で決められていない。
- ・グループホームに入居したら民生委員がまわってこなくなった。おかしい。
- ・自分たちの生の声を聞いてほしい。

私たちは感情面で敏感だから、介護されるなら私たちの気持ちをわかる人にしてほしい。

- ・認知症でも一人暮らしの人の話を聞き、自分も自立・自律しなければならないと思った。
- ・支援や介護されるだけでなく、自分のことをしたい。報酬が出れば認められたという励みになるのもっと良い。

役所に“もんく”ある。認知症施策をつくるときに自分たちを入れたら変わるのではないか。私たち当事者の声を行政に届ける仕組みが欲しい。

役所の窓口で手続きするのが大変。係の人から「頑張って忘れないで下さい」と言われた。認知症の人に柔軟な対応をしてほしい。自分たちが窓口で働いたらいいかもしれない。

周囲が学んだこと

- ・ 本人同士で話合うことができ、思いや意見をたくさん持っていることがわかり、話合いに確信が持てた。
- ・ 認知症の人は話せないだろうと聴く耳をもたず、話せなくしていたのではないだろうか。
- ・ 自分自身のなかに認知症の人への偏見があったと気づかされた。

家族や支援者が本人の代弁をすることは、本人の声を奪い、本人を「話せない人」にしてしまっている。本人が自ら話すことをゆっくり待つことが大事だと気付いた。

普段の「つどい」から本人同士の話し合いをもっとしていくことが大事。認知症の人が自ら話をすることで自信を取り戻している。

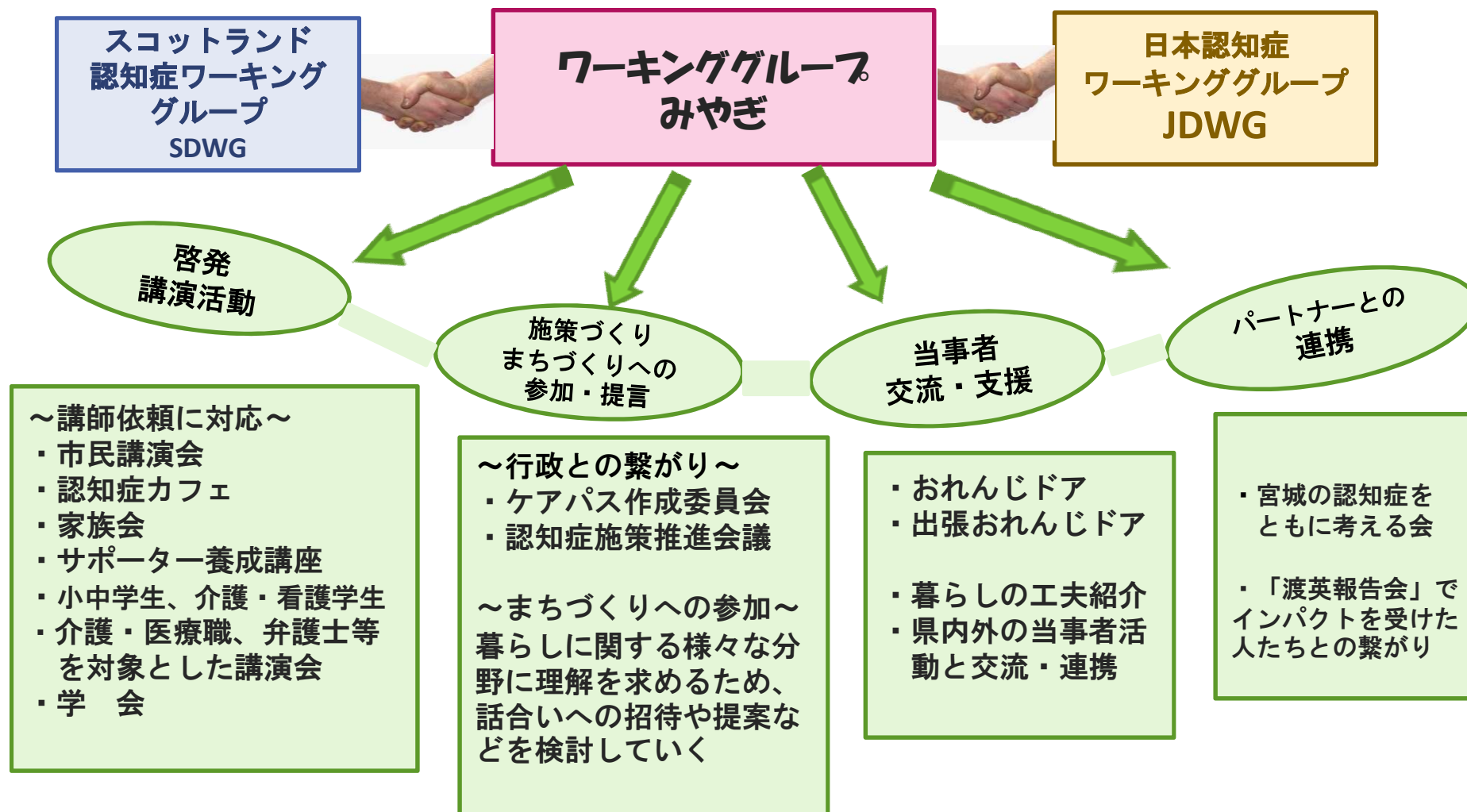
ミーティングのお茶もお仕着せではなく、本人が自分で選ぶことも大事。「本人」が自分で選びたい。決めたいと思っていることも「支援者」が支援のつもりでやってあげ、本人の選択や決定を奪っていた。

- ・ 一人の声より、多くの人の声が社会を変えていく力になる。
- ・ 体験を踏まえた当事者の声は周囲や社会を変える大きなインパクトをもっている。

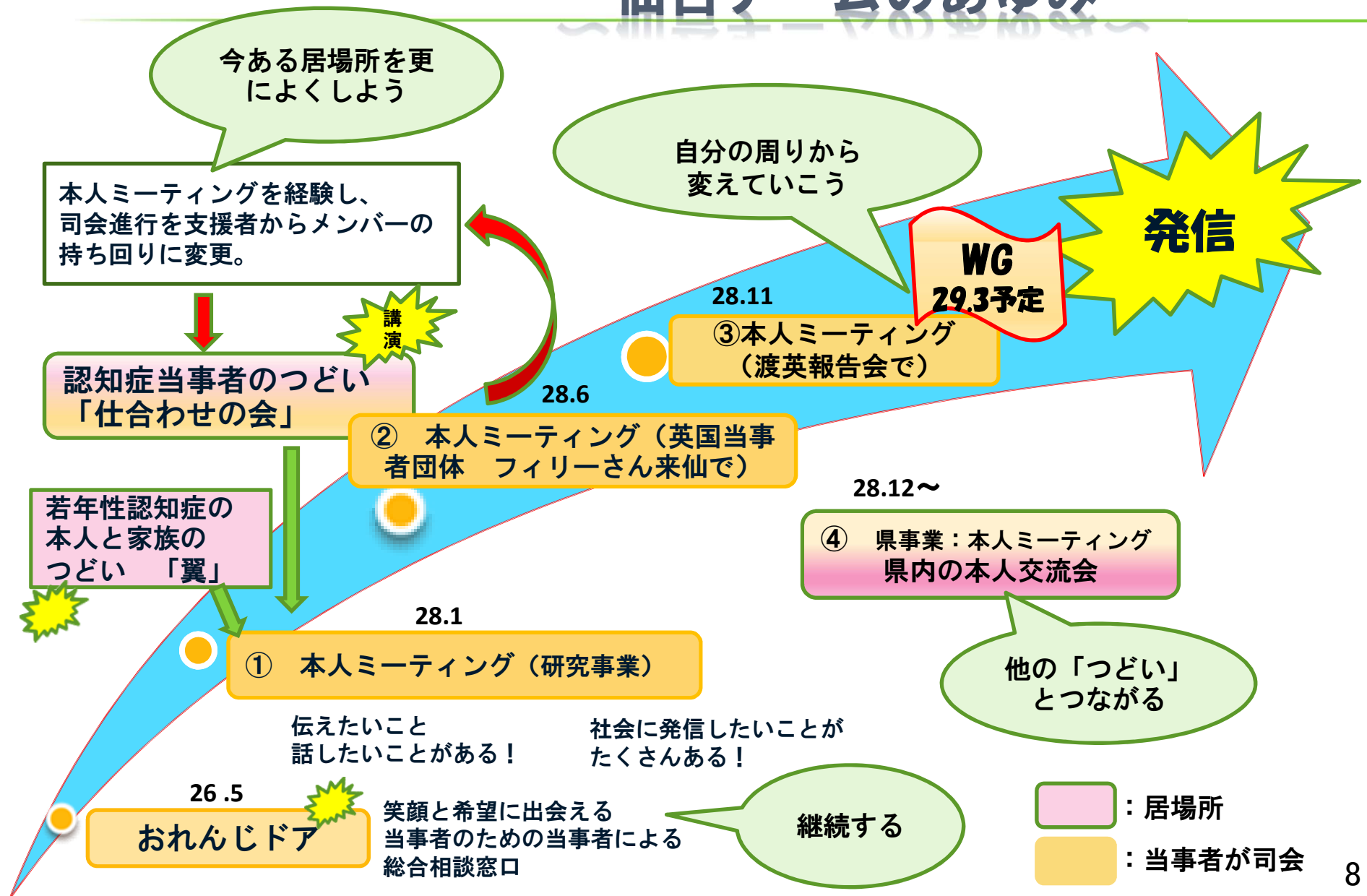
・ 参加していても、思いや言いたいことをうまく言葉にできず、十分発揮できない人への支援のあり方を考えさせられた。

本人ミーティングから発信・活躍

認知症とともにによりよく生きる人とパートナーの協働



希望の出会いから社会に発信するWGへ ～仙台チームのあゆみ～



「ワーキンググループみやぎ」への参加よびかけ



「ワーキンググループみやぎ」は現在あるような認知症カフェや居場所ではなく、認知症当事者が自分の困っていることや感じていることなどについて、テーマをもって話合う場です。

話合ったことを地域や社会に発信することで社会を変える一歩になります。

そんな話合いに参加したい当事者、自分の思っていることを知ってもらうことで社会に変わってほしいと思う当事者を求めます。

丹野智文

おわりに

「ワーキンググループみやぎ」

認知症とともに生きる当事者のワーキンググループは、認知症のプロとして、良い社会、よい未来を拓こうとするハードワークを行う場であり、認知症になった当事者が市民としての役割を取り戻す場でもあります。今年3月にスタートします。



【ある日の「おれんじドア」メンバー】

「宮城の認知症とともに考える会」 miyaginintishou@gmail.com

facebook 「おれんじドアーご本人のためのもの忘れ総合相談窓口」